

東北漫歩

(宮城縣の卷)

(一)

和泉生

足袋草鞋に身を固め、幾日となく徒歩を續けた昔の行路難も、今は唯爐邊の語り草に過ぎないが、「都をば霞」ともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」の古歌を偲へば、奥州白石への旅は吹雪に暮れることゝならう。

古來、奥州街道の要地として、縣の咽喉を托する白石町は、伊達家の功臣片倉小十郎の城下として、明治維新後、目醒しく發展せる水の街であり、永き一千年の歴史を持つ城址は、益岡公園と變つて、春は櫻、秋は紅葉の丘として、近隣近在より杖を曳く者頗る多く、殊に、寛政力士傳の華谷風と、明治の横綱大砲の碑が、堂々邊りを拂つて強く人目を惹く。

西部に點在する温泉は、何れも奇しき傳説に彩られ、創

傷の鎌先を初め、目の小原・峨々・遠刈田・青根と、五指を屈することが出来る。此の中で最も眺望の雄大を以て鳴

る青根温泉は、天文年間、奥州川崎村の百姓七平外數名、蓑を編むに用ふるアラヌキの皮を索ねて山に入り、一本の老樹を發見して近づけば、根元より白霧立ち昇り、溫氣四圍に滿つるを奇とし、地を穿てば、幾尺ならずして滾々たる泉を得た。七平等居を此の地に移し、荊棘を拓き、浴槽を設けて病弱者に浴せしめたるに、疾患即座に快癒せりと謂ひ、青根の名は、アラヌキの根元より湧きたるの故と傳ふ、

かの「はきちがへ」の海南氏愛着の地であり、其の秀景を賞して歌へる

谿をへだて山又山の むらがり

はてなきはてに 金華山は霞む

青葉にほふ谿を眞下に この宿は

五百重の山の いたゞぎを見る

まなかひに一本高き

けやきの樹

その枝の上に

金華山は霞む

青根よしと楚人冠はいひつ

國男いひつ

来て見れば我もいふ

青根はよしと

青根温泉は、刈田岳の分嶺花

房山の中腹にある。眼下に起伏

する山また山、東南二方は遠く潤けて、松島・金華山の秀

麗を展望し得べく、新緑の春、若葉の夏も一入であるが、

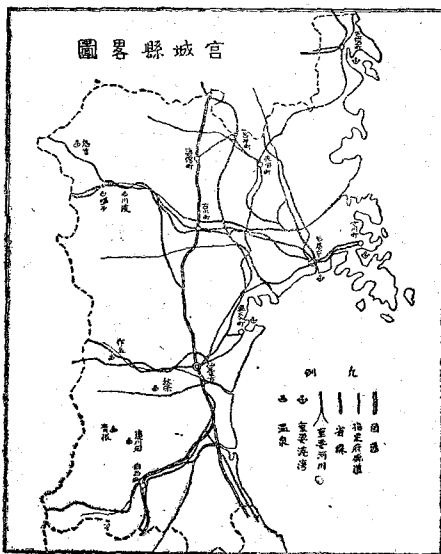
天地錦繡燃ゆるが如き秋の景觀と、白皚々たる銀盤に、ス

キーヤ一の雲集する冬の豪華版は、確に、青根の大きな誇りであらう。

白石町を抜けて、国道は白石川に沿ふ。故小野さつき女史が、其の教へ子を救はんとして、遂に溺れた涙の川で、そ

の氣高くも尊い犠牲の誠心は、漆々たる流れと共に、永遠に盡きぬであらう。殉職の場所に建てられた碑前に佇めば、琵琶劇に泣きじやくつた幼き頃の小さい感激と思慕の情が、時雨に濡れて靈魂を呼ぶ。

白石町仙臺謳市間の国道改築舗装は、縣南地方に於ける交通の重要性に鑑み、昭和六年度以降、着々進抄の途上にあり、昭和十年度には、刈田郡福岡村の見捨川橋、同十一年度には、同郡宮村の宮大橋、また同十二年度には、柴田郡船岡村、槻木町立會の白幡橋が、



夫々相前後して堅牢化したから、昭和十四年度までには、其の大部分が竣功することとなり、餘す所、僅に大河原町一帯のみとなつた。此の調子で行けば、比較的降雪量の多い該地方に、交通の春を謳歌する黎明期が、数百年を俟たずして訪れることだらう。

大和物語や拾遺集に、「名取の湯」として詠まれてゐる秋保温泉は、既に王朝時代から京都に知られ、叡聞にも達したといふ歴史上著名な温泉で、舊藩時代にも、藩主の浴館が設けられた程であつた。温泉は、明鏡名取川の沿岸より噴出し、西方磐神峽の秋は、朝鮮の金剛山を偲ばしめる麗容である。此の温泉と、國有鐵道長町驛との脇に敷設された軌道を秋保電車と稱して居るが、所謂ガタ／＼電車で、進行と停車の區別がつかぬと嘖つても、失禮ではあるまい。兎に角、短氣者には乗せたくない電車である。然し、もつとスピード化すれば、ガソリン節約の時代でもあるし、仙臺方面から一つ走りの魅力もないではない。市内の雑沓が子守唄では、寢就きの悪いものだ。大都市を控へて、何時

までも、田舎風呂としての存在は、決して賢明な策ではなからう。自動車で四十分、電車で一時間の湯の里であり、旅館の設備とて、左程批難すべきものでなく、野趣滿々の雰圍氣は、飽くまでも深山の面影を含み、松島の一泊より、秋保の一夜を味ふべきに拘らず、觀光松島の名に埋まれているのが惜しい。一體何が缺けてゐるのだらう？

慶長五年に伊達政宗公が築城して仙臺城、又は青葉城と唱へ、東奥雄藩の首都として二百六十餘年間、伊達氏の治下に段盛を極めた竹に雀の仙臺市は、都市計畫事業の進捗、仙臺・山形間を結ぶ仙山鐵道の開通、或は鹽釜港の整備等と相俟つて、更に大都市の面目を新にし、東北の學都として異彩を放つ。仙臺驛に降りて一寸右に入ると、大町通りと呼ばれる大道りである。即ち、仙臺市街を東西に貫く幹線であり、有名な芭蕉の辻が此の通りに在る。此の名の起りは、昔此處に芭蕉を植えてあつたと謂ひ、或は芭蕉といふ虚無僧（穩密との説もあり）が、政宗公から此の址を賜つて往んでゐたとも謂ふ。奥羽觀蹟聞老志補修に據れば、

どうやら後説に軍配が擧がるやうだ。

芭蕉ノ辻

仙臺市街の中心にあり。大町・新傳馬町の一路と、國分町・南町の一路と相交又して、十字形を成す處を芭蕉の辻と曰ふ。

封内記に、「芭蕉の辻は貞山公の御代、伊達より御供せる芭蕉と言ふ虚無僧あり。之に四辻を賜ふ。而も市店を厭ひ、輪王寺支配となりて、名取郡増田に移住す。其の子孫、今の不退軒なり云々」とあれば、辻の名稱これより起りしならん。往時は四辻の家屋、結構の美を極めて、最も繁華の所なりき。

寺西元永陸奥日記曰、芭蕉の辻といふて、四ツ角の所なり。四ツ角四軒の家屋皆大家也。家作二階造り。惣瓦葺の家根の隅々に獅子、或は波に兎、龍など、しやちほこの如くに置。殊外目立たる家作也。右四軒の家作普請致候節、若し自力にて難屈事有之ば、陸奥守より金子を下し、普請爲致候事のよし。左も可有之哉。殊外手厚き

普請に見ゆ。此邊は右四ツ角計に無之、近邊惣體、町並家作宜しく、猶大概は皆土藏也。此あたり、城下内の町家()は随分宜しき處のよし。左も可有之哉。格別繁昌に見ゆる也。

笹竹に短冊、吹流し、其の他色々な意匠を凝して戸毎を飾る七夕祭は、仙臺特有の名物として、近郷は勿論都會方面からも乗込む有様で、八月六、七日の兩日に於ける芭蕉の辻一帯は、黒山の賑ひを呈し、一月十四日の寒夜、大崎八幡に課詣りする奇拔極まる松焚祭どんとさいと共に忘れ難いものであらう。街外れの廣瀬川に架した大橋(慶長五年十二月着手し、同六年十二月竣功したもので、記録に依れば、横五間、堅五十間とある。爾後何回となく災害に遭ひ明治に至る。現在の新橋は、昭和十二年七月起工し、同十三年九月完成した無鉸式鐵筋コンクリート拱橋で、工事費壹百九拾七萬餘圓を要した)を渡れば、城門に突き當る。昔の青葉城の表門で、これは文祿の征韓の役に、名古屋行營の門であつたのを、政宗公が秀吉公から賜つて移したものであ

。城門を左折して急坂を登れば、天主臺跡の廣場に出る。

其の片隅には招魂社があり、中央には昭忠碑が聳え立ち、政宗公出陣の雄壯なる銅像がこれに對してゐる。此の高臺の背後は山續きになつて、前面は、仙臺市から宮城野へかけての觀望を恣にすることが出来る。此の時の視野に收まる仙臺市の全貌を、俗に「杜の都」と言ふのであらう。

東南の經ヶ峰にある瑞鳳殿は、鬱蒼たる喬杉が、苔蒸したる石段にきほひ樹つ幽邃境で、政宗公の靈廟である。二代忠宗公の感仙殿、三代綱宗公の善應殿と共に、國寶建造物に指定されてゐる。北郊の丘陵にある青葉神社は、藩祖公を祀つた社で、四方の龍雲院には林子平の墓、東方の光明寺には、慶長十八年羅馬に使ひした支倉常長の墓がある。また、東郊の榴ヶ宿公園の南には、「仙臺秋」の烈婦政岡の墓もある。

榴ヶ岡を東に出外れたところが有名な宮城野で、現在は陸軍の練兵場となり、

さま／＼に心を留むる宮城野の

花のいろ／＼虫のこえ／＼

(源俊賴朝臣)

宮城の風まちわびる秋の枝に

露をかぞえてやどる月影

(定家朝臣)

みや木のゝ露も色ある古枝草

ことしの秋も花咲にけり

(西行法師)

などの物寂びた面影はなく、昔の多感な遊子の心を傷ました所とはどうしても思へない。

大仙臺繁榮の基礎を確立した政宗公は、獨眼流の武人としての戦功は枚擧に遑なしであるが、政治家としても、最も進歩的な積極政策の持主であつた。當時仙臺藩は、戦亂疲弊の後を受け、仙臺城や神社佛閣の造營、大阪之役の出陣に次ぐ數度の上洛等に多大の財力を費し、殊に、幕府の大名に對する政策が、益々藩財政の窮迫を増大せしめた。而も此の間に在つてよく雄藩の貫祿を確保し得たのは、理

財家としての公の手腕に俟つもの實に甚大である。當時、農業が經濟上最も重要な時代であつたので、早くもこゝに着眼し、人材を登用して米穀の改良增收を圖り、消費地を江戸に求めて大いに仙臺米の聲價を高め、或は土木の權威、川村孫兵衛をして北上川を開鑿せしめ、貞山堀運河による水運系統を企畫するの外、藩内の道路に松之木を植栽して其の風致を添へるなど、今日の爲政者を啞然たらしめるものがある。

若しそれ、徳川の鎖國政策が實現されなかつたならば、必ずや公の積極政策が實を結び、殖産工業の偉大なる發達を見たに相違ない。殊に、支倉一行の八年間に涉つて獲得した西洋の新知識が、凡ゆる方面に遺憾なく發揮せられ、石巻・女川兩港を中心に、京阪地方にも優る一大工業地帯が現出し、三百年の今日、東北振興の聲を聞かずに濟んだのではあるまいかと、無念の炎が胸を焼く。

政宗公は亦禪の人でもあつた。其の遺訓こそ、日本三大遺訓の一として、貞山公の名を光輝あらしめるであらう。

仁に過ぐれば弱くなる。義に過ぐれば固くなる。禮に過ぐれば扁つらひとなる。智に過ぐればうそをつく。信に過ぐれば損をする。氣長く心穩かにして萬に儉約を用ひて金を備ふべし。儉約の仕方は不自由を忍ぶにあり。此の世の客に成たく思へば何の苦もなし。朝夕の食事うまからずともほめて食ふ扁し。元來客の身なれば好ききらいは申さ禮まじ。今日の行きおくり子孫兄弟によく挨拶して娑婆の御いとま申がよし。

さんさしぐれか菅野の雨か

音もせで來て濡れかゝる

勝凱な

武藏あぶみに紫手綱

乗せてやりたや春駒に

勝凱な

此の家座敷は目出度い座敷

鶴と龜とが舞ひ遊ぶ

勝凱な

お國自慢として唄はれる此の「さんさ時雨」は、政宗公勝軍の祝宴に歌はれたものと言ひ、或は、政宗公仙臺城に初入國の時、國中の主なる士人が今の名取郡中田村前田橋

遙出迎ひ、酒を置き、馬を休めたるに、適々細雨靜かに降り注ぎ、恰も藩公を迎ふるが如くであつた。公此の風趣を眺めて感激の餘り此の詞を唱へば、居並ぶ者皆それに和したと言ふも明白でない。私が初めて「さんさ時雨」の御馳走になつた時、お經じやないかと耳を疑つた位であつた。

一年半の仙臺暮しに、どうかして一人前にと焦つたが、遂にもものにならなかつた。負け惜みじやないが、この歌だけは大の苦手であり、折角の酒が酸つぱくなる。

險路を尊しとした封建時代も、明治維新の誕生に儻くも潰へて世相は一變し、俄然道路改良の緊急が叫ばれるゝに至り、まして、大正末期より昭和へかけての急速度の進展は、我が國道路史上の驚異的記録であり、先進國への力強い挑戦ではあるが、明治時代に於ける道路の状況は、果してどうであつたか。幸ひ、明治四十一年發行に依る縣治要觀を得たので、これによつて當時の横顔を覗いてみる。

本縣の道路ハ、國縣里道ヲ道シテ一千四百三十餘里内國道四十四里、縣道二百七十九里、里道一千百一十一里、國道

縣道ハ縣費ノ負擔ニ屬シ、里道ハ市町村費ノ負擔トシ、其ノ改修工事ニ對シ縣費ヨリ五分以内ノ補助ヲ交付ス、舊藩制ノ際ハ、領主割據ノ常トシテ、藩界ノ險惡ハ特ニ之ヲ保存シタリシカトモ、維新以後ハ、中央政府トノ交通ヲ敏速ナラシムル必要上、之ヲ改修削平スルノ急ヲ感シ、仙臺市以南ニアリテハ、明治十三年十一月陸羽街道筋、福島縣界附近ナル越河坂及鐙摺石ノ險路ヲ鑿夷シ、尋イテ越河村ノ内五賀・齋川・白石・宮各町村内ノ坂路ヲ改修シ、同十四年三月ヲ以テ竣功ス。工費金壹萬六千餘圓ハ之ヲ縣費ヨリ支出シタリ。仙臺市以北ニアリテハ、同十四年ニ工費金費貳萬壹千參百餘圓ヲ以テ、栗原郡築館・荒谷間六千七百餘圓ヲ改修シ、同十五年ニハ工費金參萬八千餘圓ヲ以テ、志田郡三本木間一萬六千間ヲ改修シ、同十七年ニハ其ノ殘部ノ改修ヲ了シ、陸羽街道ノ全部ヲ通シテ車道ヲラシムルニ至レリ。

是ヨリ先、政府ハ野蒜築港ノ議ヲ決シ、明治十一年十月ヲ以テ起工式ヲ舉ケタルニヨリ、縣ハ同地ト隣接各縣トノ

交通ヲ完備セムカ爲、一方ニハ舊慣入足中毎戸二人ノ正夫ヲ以テ道路大修繕ヲ起シ、一方ニハ所謂六大工事ナルモノヲ經始シ、十六年度通常縣會ノ議決ヲ經、七ケ年繼續工費金五拾貳萬七千餘圓ノ豫算ヲ置キ、其ノ三分ノ一ハ國庫ノ補助ヲ受ケ、之ヲ差引タル殘額ニ對スル三分ノ一ハ、關係町村費ノ支辨トシ、三分ノ二ハ縣費ヨリ支辨シタリ。

六大工事中道路ニ屬スルモノ五線。其ノ一ハ野蒜街道ニシテ、野蒜港ニ起リ志田郡鹿島臺・同郡松山ヲ經テ、同郡古川町ニ至リ、以テ陸羽街道ニ聯絡ス。工費金七萬九千餘圓、其ノ二ハ當時陸中岐街道ト稱シ、現今ハ本吉街道及登米街道ノ一部ニ當ルモノニシテ、改修ノ目的ハ、北上川沿岸ノ要津タル登米郡登米町ト、國道陸羽街道トヲ聯絡スルニアリ。工費金五萬圓、其ノ三ハ本吉街道ニシテ、改修ノ目的ハ、本縣ノ水産地タル本吉郡ト、米産地タル登米郡佐沼・栗原郡若柳・澤邊等ヲ聯絡スルニアリ。工費金四萬貳千餘圓。其ノ四ハ羽後街道ニシテ、甲乙ノ二工事ニ分テリ。甲線ハ黒川郡吉岡ニ於テ陸羽街道ヨリ分岐シ、加美郡中新

田ヲ經、玉造郡岩出山ニ達スルモノニ係リ、乙線ハ同地ヨリ同郡鍛冶谷澤及鬼首ヲ經テ秋田縣ニ通スルモノナリ。甲線ハ、當時工費金參萬參千餘圓ヲ以テ改修ヲ了リタルモ、乙線ハ秋田縣トノ交渉協ハスシテ之ヲ中止シタリ。從ツテ、總工費決算額モ亦金四拾八萬餘圓ニ減少シタリ。此ノ外、山形縣トノ直通道路ニハ作並街道アリ。仙臺市ヨリ宮城郡愛子・作並・湯元ヲ經テ山形市ニ通スル路線ニシテ、明治十三年六月、國庫金參萬七千餘圓ノ下付ヲ得、外ニ山形縣モ亦同縣改修ニ對スルモノ金五萬貳千餘圓ノ下付ヲ得テ之ヲ改修シ、又伊具・互理方面ヨリ福島縣ニ通スル直通道路トシテハ、梁川街道ヲ改修シ、桃生・登米・本吉地方ヨリ岩手縣ニ直通スル路線トシテハ、陸前東濱街道ヲ改修セリト雖、該路線ハ本縣所屬ノ分二十六里強、其ノ改修ヲ要スル局部モ亦本吉郡内ニ於テ五箇所ヲ算シ、明治十六年以來斷續シテ局所ノ削平改修ヲ施行シ、同三十八年度以來、氣仙沼以北ノ改修ニ着手シ、爾來、四十一年度迄ニ工費金貳萬七千餘圓ヲ支出シ、今ヤ、本吉郡只越以北岩手縣界間、

長五千二百餘間ノ局部ヲ餘スニ過キス、

道路ニ對スル改修前述ノ如クナルニヨリ、本縣ノ國縣道三百二十三里ハ、縣道中陸前東濱街道只越以北、羽後街道鬼首以西、羽後岐街道溫湯以西、及二口街道長袋以西ヲ除クノ外悉ク車道タルニ至リ、管内主要里道モ亦漸次改修補ノ結果、其ノ大半ハ車道タルニ至リタリ。然レトモ、從來ノ施設ハ、國縣道ト各郡ニ於ケル樞要地トノ聯絡急ニシテ、鐵道停車場ト各部落トヲ直通スヘキ里道ニ至リテハ、未ダ完備ノ域ニ達セス。

軌道ノ敷設ハ、志田郡古川町ト遠田郡小牛田町日本線鐵道停車場間ニ於ケル古川馬車鐵道及伊具郡館矢間村ヨリ同郡角田町ヲ經、柴田郡槻木町日本線槻木鐵道停車場ニ通スル角田馬車鐵道ノ二線アルノミ。共ニ株式會社ノ經營ニ屬シ、古川馬車鐵道ハ全線六哩強、角田馬車鐵道ハ全線十二哩ナリ。

之ヲ要スルニ前記ノ施設ハ、孰レモ目前交通ノ急ニ應スルニアリシヲ以テ、之カ架橋モ亦耐力ヲ主トシテ外觀ヲ問

フノ違ナク、其ノ堅牢ト美觀トヲ併有スルモノ、如キハ、

僅ニ、一二鐵橋アルニ過キス。而シテ、起工中ナル國道陸羽街道筋廣瀨橋ハ、仙臺市ト名取郡茂ケ崎村ノ接壤地ニ於ケル廣瀨川ニ架設スルモノニシテ、桁橋全長四百十九尺、幅三十尺、工費金七萬參千六百餘圓、全體鐵筋コンクリートヨリ成リ、橋面ハ步道車道ヲ別チ、之ニ鋼鐵製勾欄ヲ裝スル等最新式ノ工法ニ屬ス。其ノ工程未タ半ナルモ、來ム四十二年六月ニハ、其ノ全程ヲ了スヘク、其ノ竣功後ハ、仙臺市ニ一壯觀ヲ添フルニ至ルヘシ。

近代都市交通の癩として、夙に改良の急務を叫ばれてゐた仙臺市北口の國道も、一部を都市計畫街路に該て、昨年完成の運びとなり、現在に於ては、舊國道の難澁も他類に高速車の驀走に賑ひ、昭和六年度にもした七北田・高田・江合の三橋及同十年年度の三本木・多田の二橋竝に同九、十、十一年度に於ける志田郡古川町より同郡大衡村に至る鋪裝化と相俟つて、其の使命の重大さを痛感せしめる。

みちのくの緒絶の橋やこれならん

ふみふみずみこころまとはす

おたえ姫の悲説を語る緒絶橋と、その側の柳樹の下に建つ芭蕉の句碑、「初雪や雪かゝりける橋の上」に、そのかみを辿りつゝ古川町を北進すれば、新編丹下左膳でお馴染の千葉周作の出生地長岡村がある。文政天保年間の劍聖として、當時桃井春藏・齋藤彌九郎の道場と共に江戸三大道場と稱せられたが、神田於玉ヶ池の玄武館を以て其の第一とした。十五歳にして小野派一刀流の奥儀を極め、三十歳を出でずして新に北辰一刀流を創めた。門第一萬人を越え、玄武館の名は遂に天下を風靡するに至つた。大小諸侯辭を卑ふして聘するも出仕しなかつたが、天保十年水戸烈公の聘に應じ、月六回參邸、祿百石馬廻り中奥に進んだ。安政二年十二月十三日六十二歳を以て歿す。淺草田島町誓願寺内仁壽院に葬る、高明院男譽知底教寅居士こそ彼の法名である。

人皇四十六代孝謙天皇の勅願所と傳へられる國寶杉藥師堂の築館町を更に北すれば、栗原軌道が國道を横斷する。

起點は金忠輔を生んだ石越村で、終點は西北部の中心郡邑岩ヶ崎町である。則ち、此の附近一帯の鑛産を、國有鐵道石越驛まで搬出する目的を以て敷設されたものであるが、一時は休止の悲境に陥り、其の繼續を危惧されつゝ今次事變に直面した。増産計畫の拍車は、忽ち鑛山景氣を煽り、貞觀年代の發見にかゝると言ふ細倉鑛山の活況は、事變下の波に乗つて潑刺である。従つて、栗原軌道の輸送量も未曾有の繁忙を呈し、運轉間隔の短縮、車輛の購入、或は運轉速度の變更に伴ふ併用軌道の新設化を計り、地方鐵道として新生することゝなつた。

馬腹に一鞭すれば、間もなく岩手縣界に着く金成村には、炭焼藤太夫婦の墓が在る。平安の末期、京都の長者の娘某、或夜清水觀音の御宣託に由り、遙々奥州金成村に下向して炭焼藤太と夫婦の契りを結び、附近の砂金を採取して一大富者となつたと謂ふ。三人の男子を橋次・橋内・橋六と稱し、橋次は砂金を携へて毎年京に上り、巨萬の富を得て、金賣橋次の名を博した。其の橋次が牛若丸を東道して、平

泉に下向した時の吉次であると言ひ傳ふ。

橋次に關しては、巷説や文獻も尠くないが、其の主なるものを抜萃してみよう。

「商人鏡」

京師に金商吉次（一本作橋次）信高（一本作未春）とて、源平の頃有徳のものあり。毎年奥州へ上品の縮類を駄馬に附けて下り、彼地にて金を買ひ入れて歸り、大利を得たり。或年、鞍馬に參りけるに、源義朝の子牛若丸に逢ひければ、此の童を陸奥へ具して下り、平泉に赴きて秀衡が許へ送りしとぞ。

西陣五辻通り南櫻井辻子に吉次の井あり。これ其の宅地と言ふ。又往年奥州栗原郡三戸畑村の中にて、黄金の鶏を掘り得たり。土人の口碑に依れば、金賣吉次の宅地なりと言ふ。されば、吉次は奥州に居宅を持ちしものと思はる。兎に角、源平戦争の時代に際し、毎年奥州へ下向し、大福長者となりしが如きは、臆略ある商人といふべきか。

「奥州觀蹟聞老志」

吉次居宅、在衣川北舊礎猶存焉。吉次奥州大賈、住昔在京師。而會牛若干鞍馬寺、約東行、携之至三千平泉。秀衡相喜賞之、以貨財及第宅。此其遺跡也。

「平泉誌」

三條吉次信高（一説に季春とも言ふ）が居所下衣川にあり。衣川の北に館門の舊礎今猶殘れり。里俗此邊を長者が原といふ。吉次の舊跡とて、栗原郡金成村近傍の畑村其他所々にあり。地方に居る大賈にして、金鐵の商業を以て上京せし序屢鞍馬寺に詣で、牛若丸（義經幼名）に會ひ、遂に其の依頼に任せ、平泉に伴れ來り、秀衡之を嘉し、其の慰勞として此の宅地を與へしとぞ。

「中尊寺執事佐々木氏識」

金賣吉次は、奥州金成村（宮城縣栗原郡金成村）に、炭焼藤太なるものゝ子として生る。兄弟三人あり。即ち、吉次・吉六・吉内なり。現に三名の居住せりといふ館三箇所は金成村に在り。

吉次は商才に長け、年々奥州の砂金を京都に運び商ふを業としありしが、藤原秀衡將軍の知るところとなり、其の恩寵を受け特に士分に列せられ住宅を衣川に賜り、移りて住之。

京都の文明、即ち帝都の文化を平泉の地に移すことに努力を致し、また、牛若丸即ち義經を、鞍馬寺より秀衡の下に案内せることは周知のことなり。

古川町以北の國道は、管内出張所の不斷の心掛により、維持修繕も入念であり、並木の保存に付ても格別の注意を拂ひ、國道としての貫祿は認めらるゝが、直轄の聲なきを寂しく思ふ。然し、吉岡町より岩手縣西磐井郡一關町に至る七十軒の鐵道省營自動車路線の決定は、國道の面目を一新するものとして期待される。縣としては、此の際、全線鋪裝を敢行し、縣南地方の直轄執行と相俟つて、一氣呵成に縣内兩道の昭和維新を劃策すべく、近く鐵道省と折衝の手筈である。工事費貳百拾五萬九千圓の巨額であるが。これ式で驚く清水長官ではない。鐵道省よ、尻込みする勿れ。

「春」

花も湯の香に艶めけば

人の情けの花も咲く

朧月夜に行く人の

誰の空似か優すがた

いとし鳴子が忘らりよか

「夏」

啼くや河鹿の玉の聲

荒雄川邊の涼しさに

暮れて螢の身を焦がす

ともる灯影に君の影

いとし鳴子が忘らりよか

「秋」

水も清けりや紅葉さへ

ほろり浮んで流れゆく

晴れて錦の鳴子峽

主と見にくる逢ひにくる

いとし鳴子が忘らりよか

「冬」

雪はしろがね果てもなく

燃ゆる心は紅のいろ

ジャムプしたとて越えられぬ

戀し戀しと儘ならぬ

いとし鳴子が忘らりよか

縣北方面の旅行者は、きまつて鳴子温泉を戀しがる。唄の文句の風情が、限りなく旅の無聊を醫して呉れるからだらう。とりわけ、スキーヤーには冬の鳴子が優つて懐しいに違ひない。風雪を冒して背山のスロープを滑り、汗びつしよりに濡れた五體を湯に浸して、ポット火照りながら一杯は、悪くない。相手は「カウベ」だと言ふ。品もあるし、デツテルも佳い。てつきり神戸と早合點し、向ふの話に轉するがキョトンとしてゐる。「カウベ」は「カウベ」でも、對岸の山村鬼頭（まが）ではないか。視線が交錯して思はず爆笑。何故に鬼をオミットするのが訊ねたが解らない。こ

んな質問はどうも鬼門らしい。

外は吹雪だらう。雨戸を叩く粉雪の音に、雪國の湯の街の夜は更けてゆく。

冬十句

眠る山々ふところに眠る父

小魚つりに日向むさほる冬の川

狸小屋かたく閉して山眠る

槽燃ゆる障子越しなり潤るゝ瀧

獵銃のこだます谷や水潤るゝ

枯野行く合同葬や曇る夕

筑波暮れて鳥人歸る空寒し

花活に花枯れ炭のあき俵

我も病み父の喪に居る炬燵かな

出征の便り絶へたり莖漬

紫
朗